

「どこでもドア」？

図書館長 坂野 明子

ネット社会も成熟時代を迎えつつある昨今、活字文化の衰退が懸念されていますが、私たちが「書かれた言葉」に触れる機会は逆に多くなっているように思います。メールもラインもツイッターも、すべて文字情報です。私たちは日々それらに接しています。ただ、それらの「書かれた言葉」と、図書館や本屋さんに並ぶ書籍の「言葉」は何か決定的に違うものがあるのではないのでしょうか。

私はユダヤ系アメリカ文学の研究を長く続けています。中でもフィリップ・ロスという作家に興味を持っていますが、彼の優れた作品を読むとき、言葉のリズムに心地よさを覚えるとともに、言葉の持つ勢いにどこか別の世界に引き込まれるような感覚を抱きます。引き込まれた先はユダヤ系アメリカ人としての彼の複雑な意識の世界であり、アリスよろしくその世界に入り込んだ読者としての私は、アメリカ社会の歪みについて考えますし、ホロコーストやイスラエルを含む歴史問題についても考えます。このように優れた文学作品は読者を広い世界に連れ出してくれるのです。しかもそれは地理的に広いだけでなく、遠い過去にまで遡る、深い異次元の世界とも言うべきものです。

これはなにも文学作品に限ったことではありません。思想家、学者、芸術家、その他諸々の立場の人が真剣に書き下ろした文章は、情報提供のツールとしての言葉とは違って、私たちを別の世界に誘ってくれるのです。しかも嬉しいことに、これらの文章は今生きている人が書いたものとは限りません。三百年前、一千年前に生きた人のものがいっぱいあるわけです。つまり、読書とは一種の「旅」なのです。これはお手軽なパック旅行ではなく、ちょっと忍耐と努力を必要とする「旅」ですが、苦勞して「旅」から帰ったときの満足感は特別なものがあるでしょう。そしてそれらの「旅」につながるドアがたくさん並んでいるのが、図書館です。そういう意味で図書館は「どこでもドア」にちょっと似ていると言えなくもないと思うのですが、どうでしょう？

